

# 半構造化医療面接法による身体的背景の捉え方・依存感情および心理社会的背景の分析（来院動機の質的研究）

○福原 稔<sup>1)</sup>, 福原早紀<sup>1,2)</sup>, 文元基宝<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>フクハラ歯科医院, <sup>2)</sup>NPO 法人関西ウエルビーイングクラブ

(索引用語：医療面接, 認知モデル, 質的研究)

口腔衛生会誌 57 (4), 2007

はじめに：

患者が歯科医院を受診すること（行動）は、口腔内の状況（事実）から導かれると一般的には思われる。しかし認知モデルでは、口腔内の状況をどのように捉えるか（捉え方）それから導かれる感情（依存感情）が来院という行動を生むと思われる。認知モデルおよび身体・心理・社会モデルを用いた来院動機の分析を試みた。

方法：

われわれは、初診時医療面接において、認知モデルに基づいた半構造化されたインタビュー法を用いている。その中で捉え方を「原因が自分以外に帰属（以下原因が自分以外）」「原因が自分に帰属（以下原因が自分）」「影響・結果」「予期」に分類してみた。またこれらに依存し表出する感情を、喜び・悲しさ・不安・怒りの基本感情に分類した。また来院動機として心理的・社会的背景の聴取も試みた。

結果：

平成19年4月5月の初診（再初診）患者に対し77名にインタビューをした。捉え方の種類による依存感情の表出しやすさの傾向をみた（評価1）。主訴のとらえ方が聴取できたのは77名、そのうち依存感情が聴取できた64名、聴取できなかった13名であった。捉え方の分類での依存感情（複数回答の場合もある）に結びつく割合は、「原因が自分以外」30ケースの内11ケース（36.7%）、「原因が自分」11ケースの内10ケース（90.7%）、「影響・結果」48ケースの内38ケース（79.2%）、「予期」17ケースで全て依存感情に結びついた（100%）。64名の依存感情が出たが依存感情の種類による基本感情の表出傾向をみた（評価2）。「原因が自分以外」依存感情12ケースでは不安6ケース・悲しさ5ケースと共に多い、「原因が自分」依存感情17ケースでは怒り10ケース（後悔が多い）と最も多い。「結果・影響」依存感情47ケースでは不安33ケースと一番多い。「予期」依存感情24ケースでは不安

22ケースがあった。依存感情の種類と心理社会的背景の有無の傾向をみた（評価3）。依存感情が聴取されたが心理社会的背景がないのは40名であった。依存感情と心理社会的背景のあるのは24名であった。この64名の依存感情での心理社会的背景がある割合は、「原因が自分以外」依存感情で45%、「影響・結果」依存感情36%、「予期」依存感情29%、「原因が自分」依存感情では20%であった。

考察：

口腔の状態（身体的な背景）の捉え方として「原因が自分」「予期」の場合、依存感情に結びつきやすく来院動機として強いと思われる。一方、捉え方が「原因は自分以外」は依存感情に最も結びつきにくく来院動機として弱い。依存感情が表出しなかった13名は「原因は自分以外」「結果・影響」のとらえ方をした人の中にあり、うち9名は心理社会的背景だけが聴取でき来院動機と判明し、残り4名はいずれも明確にできなかった。認知モデル・身体心理社会モデルで73名(n=77) (94.7%)の分析が出来たことから、来院動機を理解するのに有用であることが示唆された。

## インタビューの分析の流れと評価点

